URP Osaka City University
Newsletter
Issue 36, Aug.2017
大阪市立大学 都市研究プラザ ニューズレター第 36号 2017 年 8 月

地域共同のまちづくりによる社会的不利地域の再生に向けたアクションリサーチ
子どもの貧困対策セミナー vol.1
「地域で考える子どもの貧困ー生育環境が不利な子どもの支援策を考えるー」
Child Poverty from the Perspective of Community: In search of Effective Supports for Children with Disadvantaged Background

2017 年 6 月 28 日（水）、大阪市立大学学術情報総合センター文化交流室にて、子どもの貧困対策セミナーvol.1「地域で考える子どもの貧困」が開催された（3 地区まちづくり合同会社 AKY インクルーシブコミュニティ研究所・都市研究プラザ共催）。本セミナーは、大阪市立大学先端的都市研究拠点「共同利用事業・共同研究公募」の助成を受けた「地域共同のまちづくりによる社会的不利地域の再生に向けたアクションリサーチ」の一環として実施され、本年 9 月と 12 月に第 2 回と第 3 回を開催する予定である。全 3 回のセミナー開催を通して小中学校の教職員、研究者、地域活動団体等のネットワーク形成を図ることで、地域と学校が一体となって子どもを支えていく土台を作ることを目的としている。

第 1 回目の今回は、大阪府池田市で精神科クリニックを開業しながら、池田子どもセンターの嘱託医としても勤務する精神科医の大久保圭策氏を講師に迎え、「子どもの貧困が生み出すメンタルヘルスの問題」という題目で講演をしていただいた。参加者は小中学校の教職員、行政関係者、NPO 団体職員、研究者、大学生等で総数 47 名であった。

大久保氏はまず、子どもの貧困が虐待・発達障害・低学力・無気力・暴力等の様々な問題と複合的に絡んでいることを指摘し、そのうえで、このような複雑な問題を抱えた子どもの支援策として「関わりの ABCDE」を提唱した。ABCDE はそれぞれ Assessment（見立て）、Brace（副木＜支援＞）、Constellation/Collaboration（布置/共同作業）、Definition（定義）、Evaluation（評価）の頭文字である。なかでも、子どもの抱えている問題を定義する(Definition)重要性について、大久保氏自身が関わったいくつかの具体的な事例を交えながら強調した。

時間的制約のために質疑応答は短時間で終わったが、セミナー後のアンケートでは、実際に日々子どもと向き合っている小中学校の教職員の参加者から「具体的な事例が聞けて勉強になった」、「現場で起こっていることに即当てはまる話ばかりで考えさせられた」等の感想が寄せられた。また、「今回の話の続きが聴きたい」という希望も多く、次につながる意義深いセミナーとなった。

なお、次回の「子どもの貧困対策セミナーvol.2」は埋橋孝文氏（同志社大学社会学部 教授）を講師に迎え、「子どもの貧困をどう捉えるか」という題で講演していただく予定である。

■矢野淳士（URP 特別研究員）

On the 28th of June 2017, “The child poverty seminar vol.1” was held at Osaka City University Media Center. The purpose of this series of seminars is to create a network among teachers, researchers, and community workers for child support.

In the first seminar with the audience of 47 people from schools, universities, non-profit organizations, Dr. Keisaku Okubo, a psychiatrist from Ikeda City in Osaka, was invited as a guest speaker. He talked about the children’s mental health issues caused by child poverty. In his view, child poverty is multiply connected with child abuse, developmental disorder, low achievement, low aspiration, and violence, etc. As a support for children with multiple difficulties, he proposed “ABCDE Commitment,” i.e. Assessment, Brace, Constellation/Collaboration, Definition, and Evaluation, among which he stressed the importance of the definition of a child’s problem, based upon several cases he was engaged in. From the participants, there were favorite comments like this; the seminar was helpful because it touches on the on-going problems. The second seminar is scheduled in September, and the third in December.

家と芸術を考える展覧会　第四回「藝術のすみか」を豊崎プラザにて開催

Exhibition of Housing and Art: 4th “Art Dwelling” at Toyosaki Plaza

柔らかな陽の光に恵まれた初春。都市研究プラザの現場プラザの一つである豊崎プラザでは、4 回目となる「藝術のすみか」が 3 日間にわたり開催された。豊崎プラザは、明治から大正時代に建てられた主屋とそれを囲む長屋群が住み継がれてきた一画で、近代大阪が発展してきた時期の都市住宅の姿をとどめるとして国の登録有形文化財に登録されている。

「藝術のすみか」では、豊崎長屋主屋において、数人の作家が建物のいろいろな箇所を展示スペースに見立てて作品を展示する企画である。豊崎の長屋の一軒に住む repair の二人が中心となり、各作家は下見で展示場所を決定し、そこに見合った作品を制作する。座敷の欄間を利用した作品では、明かり取りの障子の替わりに季節の花をモチーフにしたステンドグラスで華やかな意匠を作り出し、来場者の眼を惹きつけた。この他にも、床の間や縁側、建物のつくりや、ディテール、中から庭へ向ける視線などを意識した作品など、主屋の持つ魅力を尊重した展示であった。来場者は作品を鑑賞するのと同時に、普段は意識しないような細部に至るまで、建物へ眼を向ける機会となった。作品を通じて共感する思いを持った参加者同士が、楽しく語り合う輪があちこちに見られたのが印象的であった。

開催 2 日目には、参加作家によるギャラリートークと、repair による小さな演奏会が開かれた。ギャラリートークでは、各作家が制作した作品や、展示した場所への思いを順に語った。先回に引き続き出展した作家が多く、先回との違いを語る発言が出たが、作品自身の解説と同じ比重で展示場所と鑑賞者の視線の想定について語られた。このことは、伝統的な町家という空間を尊重する意識が、4 回を重ねるこの企画の中で作家に根付いてきたものとして興味深かった。作家と共にギャラリートークのステージには生活科学研究科の小池准教授が登壇し、主屋を改修した経緯などを語った。

絵と音と言葉のユニット Repair による演奏会は、谷口有佳氏のピアノと日下明氏のトロンボーンで行われた。透き通るような音のメロディーでゆったりと始まった演奏は、時には激しく曲調を変え、言葉として聴衆に訴えかけるような深さがあり、部屋からあふれるほどに集まった人々を魅了した。

住まいとしての再生を軸に進めてきた豊崎プラザでのプロジェクトの成果を一般の方へ見ていただく機会として、年に一度開催する「オープンナガヤ大阪」とともに、このように一般開放型のイベントの開催は貴重である。

■綱本琴（生活科学研究科研究補佐）

3 日間の展覧会「藝術のすみか」vol.4

【日時】3 月 24 日・25 日・26 日各日 12:00～18:00

【会場】豊崎長屋 主屋

【演奏会＆ギャラリートーク】3 月 25 日 15:00～　start

※入場無料

【参加作家】
黒田武志 http://sandscape.biz/
木鳥 works https://www.facebook.com/3kotori/
ツダモトシ http://tsudamotoshi.tumblr.com/
森綾花 https://www.facebook.com/ayakamori.artwork
repair http://repair-trom.blogspot.jp/

主催：大阪市立大学都市研究プラザ豊崎プラザ
企画：絵と音と言葉のユニット『repair』

「repair による小さな演奏会の様子。床の間・欄間・窓・卓上・外の庭にも作品が伺える」

The three days lasting exhibition “Art Dwelling” was held for the 4th time at Toyosaki Plaza. In this event several artists utilized different places of the building as exhibition space to show their work. The participating artists organized a gallery talk and a small concert, and talked about their work and their ideas regarding the exhibition. Since many artists had participated in this event before, comments highlighted the differences to the previous events. The artists explained their work, and described the exhibition space and the reactions of the customers with the same passion as before. This showed that the value of a traditional townhouse’s space became deep-rooted in their consciousness through repeated participation. This event is important for presenting the achievements of the Toyosaki Plaza to a broader public.

おとあそび工房映像振り返りの会
Meeting to reflect on videos of "Otoasobi Kobo"

障害のある人と共に、新しい表現を探求することは、その活動の参加者にとって、またその表現を鑑賞する観客にとってどのような意味があるのだろうか。活動に関係するそれぞれの人にとっての意味を探り、またその社会的意義を考えるため、実践家と研究者、そして一般参加者が意見交換を行う場を設けた。題材は、筆者が主宰する障害のある人を含む表現集団「おとあそび工房」が昨年 12 月に行なった公演の映像である。おとあそび工房は、小学生以上の約 20 名が集まり、音楽、ダンス、演劇などの即興表現を中心としたワークショップを月に一回行なっている。社会包摂型のアートマネジメントのあり方を探ることも、活動の目的の一つである。

外部ゲストによるコメントで興味深かったのは、客観的視点から、おとあそび工房特有の方法論や舞台構造が生まれていることを確認できたことである。プロのアーティストとはまた別の方法で、多様な参加者が共働で舞台製作する方法が生まれており、特に「家族と疑似家族」という現実と虚構が入り混じった演目は、「パフォーマンスというフィクション」を考えたい一方で、「ありのままの存在」を見せたいのだという相反する目的を象徴するものであると考えられた。また、一般参加者を含めたディスカッションでは、表現の欲求の源に、社会の様々な場面での「障害」に関する疑問や「自由」への葛藤があることが窺え、活動の方向性や意義を考える上で非常に有意義な会となった。

■沼田里衣（URP テニュアトラック特任准教授）

As part of research on art management for social inclusion a meeting was held on the 28th May to reflect on stage videos of "Otoasobi Kobo", a performance group that involves disabled people, and exchange opinions between practitioners, researchers and regular participants. It showed, that a method for producing theater together with diverse members, that differs from methods of professional artists, had emerged, and that questions regarding various social aspects of "disability" and struggle for "freedom" lie at the core of the performance. This meeting was very important for discussing the direction and meaning of such activities.

第 15 回都市文化研究フォーラム
15th Urban Cultural Research Forum

第 15 回都市文化研究フォーラムは 2017 年 3 月 7 ～ 8 日にチュラロンコン大学にて開催された。これは本プラザのバンコクオフィスとの共催である。当オフィスはチュラロンコン大学芸術学部によって管理・運営されており、フォーラムの開催、学術誌 "Urban Culture Research" の編集などを共同で行っている。今回のフォーラムのテーマは、"Creating Vibrant Social Spaces – New Avenues to Urban Renewal" であり、11 カ国の個人 23 名と団体 5 組、計 50 名以上の発表者があった。特に「社会空間」に焦点をあて、音楽学や芸術学以外に、地理学、文化人類学、社会学、都市計画学、経済学など多くの学術分野が交差する場所となった。日本から参加したのは基調講演を行った都市研究プラザの中川眞特任教授と一般発表の沼田里衣特任准教授であった。中川は、ハーヴェイ、ミッチェル、ソジャなどによる地理学における社会空間の議論をベースに、公共空間における倫理的な振る舞いについて論じ、沼田は「音遊びの会」の実践活動を踏まえながら、障害をもつ人々による即興演奏の実態や意味について、福祉だけではなく芸術や創造性という文脈のなかで論じることの重要性を主張した。本フォーラムは大学院生（ドクターコース）の発表の場でもあり、チュラロンコン大学から 4 グループが研究発表を、ノルウェイの University of Trondheim の学生がパフォーマンスを披露した。2 日間の参加者は延べ 200 名を超え、本フォーラムがアジアとヨーロッパの研究者をつなぐ接点となりつつあることが実感された。

■中川眞（URP 特任教授）

The 15th Urban Cultural Research Forum was held from the 7-8th March at the Chulalongkorn University in Bangkok. This year's topic was "Creating Vibrant Social Spaces – New Avenues to Urban Renewal". In 23 individual and five group presentations over 50 people from 11 countries presented their works. The forum focused especially on "social spaces" and became a place for exchange between many academic fields like musicology and art science, but also cultural anthropology, sociology, urban planning, economics and others. From Japan Prof. Shin Nakagawa and Assoc. Prof. Rii Numata from the URP participated.

先端都市学講座第２回「元犯罪者の再統合とインクルーシブなコミュニティづくり」
The Integration of Ex-Offenders into the Local Communities and the Construction of an Inclusive Community

ニュースレター34 号で報告したとおり、「先端都市学講座」を開講した。都市論関連分野の第一線で活躍されている先生方をお呼びして、大阪市立大学の研究者とともに公開の場で議論しようというものである。その第 2 回を 2017 年 1 月 21 日（土）西成プラザにて開催した。

元犯罪者の再統合というテーマは、昨年 9 月に開催された都市研究プラザ 10 周年記念国際シンポジウムでも、最も注目されたテーマのひとつである。背景には、出所者支援を地域コミュニティ全体で行うという近年の潮流があるが、実際に世間で受け入れられているとは言い難い実情がある。刑事司法と福祉の間の葛藤を整理し、NIMBY 問題や自己責任論を克服する論理を市民社会に提示することは不可避かつ喫緊の課題であると考えられる。講師として、元犯罪者の地域生活支援について研究を続けてこられた、立教大学コミュニティ福祉学部教授の小長井賀與先生をお招きした。

参加者は都市研究プラザ関係者や保護観察所や少年院の実務者などを中心に 20 数名。講演では、先進国における犯罪の背景に、格差の拡大、雇用の不安定化など社会経済的な要因が潜んでいて、元犯罪者の再犯防止に社会全体で取り組む必要があることが指摘され、また、その先進的な例として、欧州や日本の「連帯経済」による社会統合の試みが紹介された。続くパネルディスカションでは、西原実氏（京都保護観察所）、金澤真理氏（大阪市立大学法学研究科）のお二方が指定討論者として加わり、東西の文化的背景の違いから社会的企業の活用など多くの観点から社会的包摂の在り方をめぐる議論が交わされた。フロアからも活発な発言があり，議論は懇親会にまで持ち越された。

■綱島洋之（URP 特任講師）

The 2nd session of “The Leading-edge Urban Studies Seminar” was held on January 21st in Nishinari Plaza. As a lecturer, we invited Konagai Kayo (Rikkyo University), who has been working on the integration of ex-offenders in the local communities. After her lecture, Nishihara Minoru (Kyoto Probation Office) and Kanazawa Mari (Graduate School of Law, OCU) offered comments from some different angles. In the following panel discussion, the panelists and the audience shared several new questions, such as how to collaborate with the social sector, what it is to consider social inclusion within the Asian context, etc.

■イベント情報

第7回東アジアインクルーシブシティネットワーク（EA-ICN）の構築に向けたワークショップ
―引き裂かれた都市から包摂型都市へ―

■会期：2017年8月21日（月）～24日（木）
■会場：大阪市立大学西成プラザ等（21日）、八尾市立安中人権コミセン（22日）、堺市庁舎等（23日）、大阪市内ほか現場視察（24日）

現地視察と並行し、下記のセッションテーマに関連した各都市の関連施策および民間実践の報告と自由討論を組み込んで実施します。
◎ジェントリフィケーション・空間をめぐる都市政治 ◎居住貧困層への居住福祉実践の理解と共有 ◎多文化共生と外国籍支援 ◎都市ネットワーク会議

URP Osaka City University 大阪市立大学 | Urban Research Plaza 都市研究プラザ

「都市研究プラザ」は、都市再生へのチャレンジとして大阪市立大学が 2006 年 4 月に設立した全く新しいタイプの研究教育組織です。「プラザ」という名前が示すように、都市をテーマとする人々が出会い、集まる広場をめざしています。先端的都市研究拠点として、現場や海外での研究・まちづくり活動、さらに、世界第一線級の研究者や政策家と国際的なネットワークを構築しています。

http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/

大阪市立大学都市研究プラザ　ニューズレター　第 36 号
編集長（発行責任者）阿部昌樹
副編集長　全泓奎　水内俊雄　岡野浩
編集主幹　鄭栄鎭　波床尚美

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138　tel.06-6605-2071
e-mail：office@ur-plaza.osaka-cu.ac.jp
所長　阿部昌樹　　副所長　全泓奎　林久善
ユニット長　1U 阿部昌樹　2U 嘉名光市　3U 水内俊雄　4U 岡野浩